

論文の要約

報告番号	乙 第 1 号	氏名	稲葉美樹
学位論文題目	飛鳥井雅経の和歌表現		
<p>飛鳥井雅経は、鎌倉に在住した時期があり、その後も複数回にわたって都と東国を往復している点、同時代の他の都の歌人とは異なる要素を持つ。一方、雅経の和歌については、『八雲御抄』に「人の歌を取る」という批判が見え、また藤原定家の歌合判詞では本歌を取り過ぎると指摘されている。現代の研究者からは、自然の音に耳をすましてその流動する相を歌の上に定着してゆく、秀句的表現に強い関心をもつ、といったことが指摘されている。これらの指摘に導かれつつ、飛鳥井雅経の和歌表現を可能な限り多角的に探ることを意図したのが本稿である。</p> <p>【同時代歌人の歌からの摂取】 雅経の和歌に用いられている表現を句単位で調査し、同時代歌人からの摂取について検討した結果、相当数が見られ、約二句が同一である例も少なくはなく、「人の歌を取る」という批判も肯わざるをえないと思われる。ただし、先行歌に大きく依存する作はあまりなく、主題乃至は状況を転じるなど、何らかの新鮮さを加えようとする意識が見られた。複数の先行歌から、異なる表現を摂取して構成した作もある。作品別では、『六百番歌合』からの摂取が目につく。また、雅経が摂取することが多かった歌人は、定家・慈円・有家・俊成・西行・後鳥羽院・良経らであった。【独自表現】 同時代歌人が雅経の独自表現と思われるものを摂取した例も少なからず見られる。摂取した例が多いのは後鳥羽院で、雅経歌が詠まれてからあまり時間をおかず摂取していることも多い。また、後鳥羽院は雅経が創出した表現を自家薬籠中の物としている。次に多いのは順徳天皇で、複数の句を摂取していると思われる作もある。【自然詠】 雅経の自然詠には嵐を詠んだ歌が多い。特に「よもの嵐」という表現を長期にわたって用いている。「志賀の浦波」を詠む歌も多い。聴覚によって自然を捉えた作に優れたものが存するという特徴もある。【羈旅歌】 山越えを詠んだ歌が多い。自然詠・羈旅歌では旅における実体験を反映していると思われる、緊迫感・臨場感のある作が多くみられる。【地名掛詞】 雅経には他の歌人以上に地名を掛詞にして詠んだ作が多い。それ以前にはない掛け方をした例も多く見られる。【本歌取】 雅経は、本歌取の際に本歌を取り過ぎる、本歌から取った語句を本歌と同じ位置に置く、という批判を受けているが、実際にそのような歌は多い。ただし、取り過ぎではあっても、主題や状況などを転じて、新鮮さを加えようとする意識は感じられ、中には秀歌とされるものも存する。【非題詠歌】 順徳天皇の命を帯びて鎌倉へ下向した際の歌群では、臨場感のある作は題詠の羈旅歌よりもむしろ少なく、地名掛詞の歌が多い。非歌枕を詠む際には、都の人に馴染みのある地名などに関わらせて詠む作もみられる。これらは、この歌群がおそらく順徳天皇に奉られたことと関わるとと思われる。また、雅経五〇歳の時に女子が死去した際の歌群では、数は少ないものの本歌取や作例の少ない表現を用いた作もあり、このような状況下で作歌する際にも表現を工夫する意識は失われなかった。</p> <p>以上のような雅経和歌に見られる特徴は、詠作時期が判明する中で最初の作品である『鳥羽百首』に既に存し、生涯にわたって見られた。個々の作品における多寡はあるものの、全体を通して見た場合に増加乃至は減少するという傾向を見いだすことはできない。一方で、たとえば、『正治後度百首』において五神通という作例の少ない題材を詠む、『千五百番歌合』の雑歌は旅の歌が多い、『建保四年院百首』においては述懐歌が比較的多いなど、個々の定数歌に見られる特徴があり、雅経は常に新たな試みを行っていたのではないかと考えられる。</p>			